

世界の文学

14

パヴェーゼ

集英社版 世界の文学 ⑭ パヴェーゼ

美しい夏 丘の上の悪魔 河島英昭 訳

月とかがり火 米川良夫 訳

集英社

集英社版世界の文学14

パヴェーゼ

一九七六年四月二〇日印刷

一九七六年五月二〇日発行

訳者 河島英昭／米川良夫

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三―六―五

電話 (〇三) 二三九―三八一一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

電話 出版部 (〇三) 二三〇―六三六一

販売部 (〇三) 二三〇―六一七一

印刷所 中央精版印刷株式会社

大日本印刷株式会社

目次

美しい夏

河島英昭訳

3

丘の上の悪魔

河島英昭訳

85

月とかがり火

米川良夫訳

209

流刑地

河島英昭訳

340

三人の娘

河島英昭訳

353

自殺

河島英昭訳

367

丘の上の別荘

河島英昭訳

383

麦畑

河島英昭訳

395

川の対話

河島英昭訳

408

ヌーデイズム

河島英昭訳

414

解説

河島英昭

423

著作年表

436

美
し
い
夏

あのころはいつもお祭りだった。家を出て通りを横切れば、もう夢中になれたし、何もかも美しくて、とくに夜にはそうだったから、死ぬほど疲れて帰ってきててもまだ何か起こらないかしら、火事にでもならないかしら、家に赤ん坊でも生まれないかしらと願っていた、あるいはいっそのこといきなり夜が明けて人びとがみな通りに出てくればよいのに、そしてそのまま歩きに歩きつづけて牧場まで、丘の向うにまで、行ければよいのに。「あなたたちは元氣だから、若いから」と人には言われた、「まだ結婚していいから、苦勞がないから、むりもないわ」でも娘たちのひとり、びっこになって病院から出てきて家にはるくに食べ物もなかったあのティーナ、彼女でさえわけもなく笑った、そしてある晩などは、小走りにみなのをついてきたのが、急に立ち止まって泣き出してしまった、だって眠るのはつまらないし楽しい時間を奪われてしまうから。

ジーニアは、そういう危機に襲われても、人には気づかれないように誰か友だちを家まで送って行って話しに話した、しまいいにはお互に何を言っているのかわからなくなるまで。そのうちに別れる瞬間がきた、そのときはもうしばらくまえから彼女らの心は離れ離れになっていた、それゆえジーニアは落着いた気持で家に帰り、友だちといられないことを嘆いたりしなかった。いちばんすばらしかったのは、もちろん土曜日の夜だった、踊りに行つたうえに翌日は寝坊ができたから。しかしあまり眠れなくてもかまわなかった。そして仕事に出かける朝にも、ジーニアは、彼女を待ち受けているいつものあの街路へうれしそうに出ていった。ほかの娘たちなら言いもしたらう。「ゆうべは遅かったから、まだ眠いわ。遅く帰ったのに、起こされちゃったの」しかしジーニアはおよそ疲れを知らなかった、それで夜勤をしている兄とは夕食のときしか顔を合わせなかった、昼間は兄は寝ていたから。お昼の時間に（彼女がもどってくる）とセヴェリーノはベッドのなかで寝返りを打った。ジーニアは食卓の用意を整え、おいしさを囁みしめながらゆっくりと、家のなかの物音に耳をすませて食事をとった。時はゆるやかに流れていった、まるで人氣のない寄宿舎にでもいるかのように。それゆえジーニアには流しに放り出されたお皿を洗ったり、お掃除をする時間が少しあ

った、それから窓ぎわのソファに横になつて隣室から聞こえてくる目覚まし時計の秒針の音に聞き入りながらうたたねをする時間も。ときには部屋を暗くしてさらにひとりきりになるため、鑑戸（かんと）を閉ざすこともあった。なぜならローザが三時には階段を降りてきて立ち止まり、起きているわよと彼女が答えるまでは、セヴェリーノの目を覚まさないうちに、そつと戸口をこすつてくれるからだ。それからふたたび外に出て、市電のところで別れた。

いっしょのものとしては、ジーニアとローザにはあの少しばかりの道のりと星型の真珠の髪飾りしかなかった。けれどもいつかショーウィンドウの前を歩いていたときにローザが言った。「あたしたち姉妹みたいね」ジーニアはその星型の髪飾りがありきたりのものだと思つていたから、もし自分も女工に見られたくなかつたら小さな帽子をかぶらなければいけないだろうと思つた。とりわけ、ローザがまだ父親や母親の言うなりになつて、いつになつたら帽子ひとつ買えるかわからない、いまのうちに。

彼女を起こしに立ち寄つたとき、遅くなければローザはなかに入ってきた。するとジーニアは片づけを手伝わせながら、すべての男と同じようにセヴェリーノも家のなかをきちんとしておくことの意味がわからないのよ、と低い声で笑つた。冗談をつづけるために、ローザは彼をへあな

の旦那さんと呼んだ、しかしジーニアはしばしば眉を曇らせて、家事の煩わしさばかりかかえこみながら男手がないのはあまり楽しいことではないのよ、と言ひ返した。冗談を言つていたのだ、ジーニアも——なぜならその時刻にひとりきりで女主人のように家のなかにいることこそ、彼女の喜びだったから——しかしローザには自分たちがいつまでも子供でないことをときどきわからせてやらなければならなかつた。道なかでもローザは身の振舞いかたを知らなかつたので、大声をたてたり、笑つたり、後ろを振り向いたりした——ジーニアは彼女を踏みつけてしまいたかつた。けれどもいっしょに踊りに行くときにはローザが必要だつた、彼女は誰にでも馴れ馴れしく話しかけたり、ばかなまねをしてまわりの人間にジーニアのほうがずっと上品だとわからせることができたから。ふたりが別々に生きるようになった、あのすばらしい年に、自分とはかの娘たちとの違いは家にいてもひとりであることだ——セヴェリーノは教に入らなかつた——そして十六歳で一人前の女のようになつていくことだ、とすぐにジーニアは気づいた。だからこそ星型の髪飾りまでして、ふざけながら、ローザがついてくるのを許していた。そのあたりに、ローザほど愚かな娘は、いくらさがしても見つからなかつた。笑つたり空とぼけたりしながら、彼女は相手かまわずにこきおろ

せたとし、いく晩もつづけてばかなまね以外の何ものでもないことを言ったりした。そして雄鶏おんどりみたいに喧嘩けんかをした。

「どうしたんだい、ローザ？」オーケストラが演奏しはじめるのを待つあいだに、誰かが言った。「こわいのよ」(じつさいに彼女の目はとび出していた)「あのかげに年をとった男の人がいて、じっとあたしを見ているの、外で待ち伏せしているのよ、こわいわ」相手はその言葉を信じなかった。「きみのおじいさんだろう」「ばか」「ねえ踊ろうよ」

「だめ、こわいから」半周も踊らないうちに、ジーニアはまた別の男が大声をたてるのを聞いた。「お行儀の悪い娘だねえ、この魔法つかいめ、さっさと消え失せろ。おまえの工場へ帰りな！」そうやってローザは笑い声をたて、まわりの人間たちを笑わせた、しかしジーニアは踊りつづけながら、彼女をああい娘にしたのはほんとうは工場なのだ、と思った。その証拠に工員を見ればよかった、彼らも同じようにおどけながら他人とのつきあいをはじめるから。

集まった仲間のなかにひとりでも工員が入っていれば、夜がふけないうちに誰か女の子が怒り出したり、あるいは、もっとはかな娘だと、泣き出したりするのは目に見えていた。彼らはローザと同じように相手を冷やかした。いつても女の子を草原につれていこうとした。彼らとは気を許し

て話しあえなかった、すぐに身を守る必要があったから。

しかし歌を唱うたう晩などには彼らはすばらしかった、とても上手に唱った、とくにフェルツチョがギターを持ってきたときには。彼は背が高く、金髪で、しじゅう失業していたが、そのくせカーボンで指先を黒く汚していた。あの大きな手があれほど上手に弾きこなすとは信じがたかった、そしてジーニアは一度だけみなとつれだって丘から帰ってくるとき脇の下にあの指先を感じた、ギターを弾いているときには彼の指を見ないように注意した。あのフェルツチョが二、三度、彼女のことをたずねていた、とローザが教えてくれた。ジーニアは答えた、「まず爪つめをきれいにするよ」うに言ってやってちょうだい」その後フェルツチョが笑いかけてくるものと彼女は思っていた、ところがフェルツチョは彼女を見向きもしなかった。

しかしついに両手で帽子をととのえながらジーニアが洋服店から出てくる日がきた、しかもその入口でローザにばったりと出会ってしまった。「どうしたの?」「工場から逃げてきちゃったの」ふたりはいっしょに歩道を市電まで歩いたが、ローザは話そうとしなかった。ジーニアは、いらだちながら、言うべき言葉を知らなかった。市電を降りて、家が近づいたときに、はじめてローザが弱々しくつぶやきながら言った、あたし妊娠したかもしれないの。ジ

ニアは彼女を愚かもの呼ばわりして、ふたりは街角で言い争った。それからそのことはそれまでになった、というのもローザがただ取り乱してそういう状態になったとわかったから、しかしその間ジーニアの心のほうが彼女よりも騒いでいた、ほかの者たちが楽しんでるあいだ子供あつかにされ騙されていたみたいな気がしたからだ、それも野心のひとかけらさえないように振舞っていたあのローザにまで。へあたしはもつと価値があるのよ——とジーニアは心のなかで言った——十六歳では早すぎるわ。自分を浪費したいというのならしかたないけれど、そうは言ったものの思い返すたびに屈辱は湧いてきた、なぜなら、彼女はひとりで生活していたから、男の手に触れられただけでも胸が激しく動悸した、それなのにほかの女の子たちはそれをおくびにも出さずにみな草原へ行っていたのだ、そう思うと息が詰まった。「なぜあの日あなたはわたしに言いにしたの？」とある日の午後いっしょに外へ出たときローザにたずねた。「だってほかに誰に言ったらいいの？ あたし苦しかったの」「なぜそのまえにあたしに何も言わなかったの？」ローザはもう落着きを取りもどして、笑い声をたてた。そして口調を変えた。「言わないほうがもったいいのよ。話す悪いことがあるから」ジーニアは思った、へばかね、この子ったら。いまは笑っているけれど、あの

ときは死ぬつもりだったくせに。まだ一人前の女じゃないわ、これでわかったわ。他方、たったひとりで、通りを往き来しているときにも、あたしたちはまだみな若いんだわ、自分の生き方が身につくためには、せめてはやく二十歳にならなければ、と彼女は思った。

ある宵のことジーニアはローザの恋人をつくづくと眺めた——ビーノは曲つた鼻の小柄な男で、ビリヤードだけが得意で、何もしていなかった、そして口の片隅で話した。彼がどれだけ卑怯な男かわかったあとでもなぜローザがつれだって映画館にくるのかジーニアにはわからなかった。みなでいっしょにボートを漕ぎに行つて錆びたみたいにそばかすだらけのビーノの背中を見た、あの日曜日のことが、彼女の頭から離れなかった。いまになってみれば、あの日ローザは彼と木陰に降りていった。それがわからなかった自分はなんてばかだったのだろう。しかしローザのほうがもつとばかだった、それでもう一度、映画館の入口で彼女にそう言つてやつた。

思えばボートを漕ぎには何度も行った、そして誰もがふざけ、笑いころげ、ふたりずつ手を取りあつて歩きまわった。ジーニアはほかの女たちに氣を奪われていたので、ローザとビーノのことに氣づかなかつた。昼さがりの暑さのなかで彼女とびっこのティーナだけが親船にとり残された。

ほかの友だちは、ローザもふくめて、みな岸にあがつてしまいい、そこから叫び声が聞こえていた。ブラウスにスカートををはいていたティーナが、ジーニアに言った。「誰もこないのなら、あたしも脱いで日に当ろうかしら」ジーニアは自分が番をしていてあげるからと彼女に言ったが、そのくせ川岸の声や静けさに耳をそばだてていた。静かな水面にすべてが沈黙してわずかの時が流れた。ティーナは腰にタオルを巻きつけて、太陽の下に横たわった。そのときジーニアは草の上に跳び移って裸足のまま数歩あるいた。男たちをたくさん後に従えていたアメリリアの声は、もう聞こえなかった。ジーニアは、愚かしくも、みなが隠れん坊でもしているものと思ひこんで、誰のこともさがさなかった、そしてボートにもどってきてしまった。

2

ただアメリリアだけは別の生活をしていることがわかった。兄は工員だったが、彼女のほうはあの夏の夕べに、ときどきしか姿をあらわさなかった、そして誰にも心のなかを打ち明けずに誰に対しても笑顔を向けた、それも彼女が十九か二十歳になつていたからだ。ジーニアは彼女ぐらいの背丈になりたかった、何しろアメリリアの脚には、薄い

ストッキングがとてもよく似合ったから。けれども、水着姿になると、アメリリアは腰のまわりがとび出して、見た感じが少し馬みたいだった。「あたし失業しているのよ」ある晩、彼女の服を眺めていると、ジーニアに言った。「あたし一日じゅうひまだから自分に似合うスタイルの服装を研究しているの。あなたみたいに洋服店で働きながらあたし裁ちかたを覚えたのよ。あなたも裁てるんでしょ？」人に作らせるほうがすてきなのに、と彼女は心のなかで思ったが、口には出さなかった。そのかわり、その晩はいっしょに歩きまわった、そしてジーニアは彼女を家まで送っていった、目がすっかり冴えてとても眠れそうになかったから。雨が降ったので、アスファルトも草も木もすっかり洗われていた。さわやかな風が顔に感じられた。

「あなた散歩が好きね」と笑いながらアメリリアが言った。「お兄さんのセヴェリーノのほうはどう？」「セヴェリーノはいまごろ仕事中よ。街灯をみなつけて見張っているの」「じゃ若い男女を照らし出すのは彼なのね？　どんな服装をしているの？　ガス会社の人みたいかしら？」「まあ、ちがうわ」ジーニアは笑いながら言った、「本局で配電盤を見張っているのよ。機械のまえで夜を明かすの」「あなたたちふたりだけで生活しているの？　あなたには口やかましくない？」アメリリアは何もかも知りつくしている者

の陽気さで話した、それでジーニアもこだわりなく友だちどうしの言葉づかいで彼女と話した。「あなたは失業してから長いのか」と彼女にたずねてみた。

「仕事ならひとつあるわ。あたし、絵に画^かかせているの」

声を聞いているだけでは冗談みたいだったので、ジーニアは相手を見返した。「絵に画^かせるって、何を？」

「顔や形を、服を着たり脱いだりして。ふつうはモデルって言いわ」

ジーニアは相手にしゃべらせようとして驚いたふりをしながら聞き耳をたてたが、アメーリアの言っていることはよくわかっていた。ただそれを彼女が自分に話すとは思ってもしなかった、なぜなら彼女らの仲間の誰にもアメーリアはその話をしたことがなかったから、そしてわずかにローザだけがその秘密を門番の女たちから聞き出していた。

「ほんとうに画家のところへ行くのか？」

「行ったことがあるわ」とアメーリアが言った。「でも夏は外の景色を画くほうが安あがりなのよ。冬は裸でポーズを取るには寒すぎるし、だからほとんど仕事はないの」

「あなた脱い^だことがあるのか？」

「ええ、あるわよ」アメーリアが言った。

それからジーニアの下腕を取って、言い足した。「仕事としては良いのよ、だって何もしないで話を聞いていれば

いいんですもの。いつかすごく大きなアトリエのある画家のところへ行^いったときには、人がくればお茶を飲んでいたわ。いながらにして世の中のことが学べるという点では、映画いじょうよ」

「あなたがポーズをとっているところへ入ってきたの、よその人が？」

「許しを求めたわ。いちばんおかしいのは女ね。女も絵を画くのよ、知っていた？ 女の子にお金を払ってその裸を写すのよ。なぜ自分で鏡の前に立たないのかしら？ 男を画くのならまだ話がわかるんだけれど」

「きっと画^かいているわよ」と、ジーニアは言った。

「画^かいていないとは言わないわ」そう言いながらアメーリアは、下の入口の前で立ち止まって、片目をつぶってみせた。「でも、モデルによっては倍のお金を払う場合もあるのよ。世の中っていろいろだからすてきなね、きっと」

ジーニアはなぜときどき会いにきてくれないのかと彼女にたずねた、そして夜のぬくもりがほとんど拭^ぬき取^りてしまったアスファルトの反映の上を、ひとり歩いて帰ってきた。今年をとっているくせに、少し自分のことを話さざるわ——ジーニアはそう思いながらも、満足だった——あたしが彼女みたいな生活をしていたら、もっと上手に立ちまわるわ」

何日たってもアメリリアが会いにきてくれないとわかったときにジーニアは少しがっかりした。たしかに彼女はあの晩すんで友だちになろうというようすはみせなかったが、それなら——とジーニアは思った——ああいう話を相手かまわずにするという証拠だし、彼女はほんとうにばかだということになるわ。もしかしたらあたしを何でも信じこむ女の子だと思ったのかしら。それでジーニアは、ある晩、仲間の女の子たちが大勢いるときに、ひと目でアメリリアがモデルだとわかる絵を店先で見つけた、と言いつらした。みなはその話を信じこんだが、ジーニアが言いたかったのはそれが身体つきから彼女だとわかったということだった、なぜなら、裸体のモデルを画くときに、画家はわざと顔を変えるから。「この程度のものかしらねえ」とローザが言ったので、彼女は無知をからかわれた。「あたしなら自分の肖像を画いてもらったうえにお金までもらえれば満足だわ」と、クララが言った。それからアメリリアが美しいかどうかという議論になると、以前に彼女らとボート乗りに行ったことのあるクララの兄が、裸なら自分のほうが美しいと言いつ出した。女の子たちがみな笑った、それでジーニアが言った言葉は、誰にも聞こえなかった。「美しい身体をしていなければ画家は絵に画かないわ」その晩は悔しかった、怒って泣き出したいくらいだった。し

かし何日かたって、アメリリアに——市電の降りざわで——また出会ったときにはつれだっておしゃべりをした。ジーニアはアメリリアよりも上品でさえあった、帽子を手を持って歩きながら、笑うたびに白い歯がほころびた。

翌日の午後アメリリアが彼女をさがしにきた。暑さのなかを、開け放たれた戸口に、彼女は姿をあらわした、それゆえジーニアは自分が見られることなく暗闇のなかから彼女を見た。いったん鎧戸を開け放つと、彼女らははしゃいだ、そしてアメリリアは帽子で風を送りながら、あたりを見まわした。「あの戸口の思いつきは気に入ったわ」と、アメリリアが言った。「あなたは仕合わせねえ。あたしの家じゃしたくてもできないわ、一階なんですもの」それから、セヴェリーノが眠っている別の部屋を見ながら言った。「あたしのところはまるで市場よ。ふた部屋に五人いるの、猫を別にして」時間がくるとふたりはいっしょに外へ出た、するとジーニアが彼女に言った。「あなたのお家の一階に飽きたら、会いにきてね、ここは静かだから」アメリリアにはわかってもらいたかった、彼女の家の人たちを悪く言うためにそう言ったのではなく、お互に理解しあえるのがうれしいから言ってしまったのだ、と。しかしアメリリアは来るとも来ないとも言わずに、市電に乗るまえにコーヒををごちそうしてくれた。そして翌日は姿を見せなかった、

そしてまたその翌日も。そのかわりにある晩、帽子もかぶらずにやってきた、彼女はソファに腰かけると、笑いながらタバコを求めた。ジーニアはお皿を洗い終っていた、そしてセヴェリーノはひげをそっていた。彼がタバコを差し出し、濡れた指で火をつけてやった、三人は街灯のことを冷やかしかつた。セヴェリーノは急いで出かけなければならなかったが、あまり夜ふかしをしてはいけないうだけジーニアに言い残した。アメリリアはさも面白いといった表情で彼を見送った。

「あなたダンスホールはぜんぜん変える気ない？」とジーニアに言った。「あそここの男の子たちはとてもやさしいけれど、少し息苦しいわ。あなたの仲良しの女の子たちみたいに」

彼女らは町の中央に向った、ふたりとも帽子をかぶらずに、さわやかな街路から街路を抜け、まず手はじめにアイスクリームを買って、それをなめながら往き交う人びとを眺めては笑った。アメリリアといっしょにいれば何もかもはるかに容易だった、そして何ごともないことではないかのように心から楽しみを味わえたとし、その晩はいろいろなことが起こるような気さえたし。もう二十歳になって、平気であたりを見まわしながら歩けるアメリリアがいっしょだから、ジーニアは安心していられた。暑ければ、アメ

ーリアはストッキングもはかなかった。やがて一軒のダンスホールのそばを通りかかったとき、それは小さなテーブルの上に傘^{かさ}つきのランプをともしで楽団が小声で演奏しているホールだったので、そのなかへ入っていくのかと思うと、ジーニアはこわかった。まだ一度も足を踏み入れたことのない場所だったから、彼女は息をのんだ。アメリリアが言った。「あなたまさかこのなかに入りたくないんじゃないでしょう？」

「暑いわ、それにあたしたちきちんと着がえてこなかったんですもの」と、ジーニアは言った。「お散歩しましょう、そのほうがすてきよ」

「あたしだって入りたくないわ」と、アメリリアが言った、「でも何をしたらいいの、あたしたち？ あなたまさか街角に立って通りがかりの人たちに笑いかけようというんじゃないでしょうね？」

「あなたこそ何がしたいの？」

「女でさえなければ、自動車にでも乗って、いまごろはあたしたち遠くの湖畔に行つて泳いでいるわ」

「歩きながらお話ししましょうよ」ジーニアが言った。

「丘に行つて一リットルも飲んで、いちど大声で歌ってみたいわ。あなたはどう酒は好き？」

ジーニアは好きでないと言った、そしてアメリリアはホ

ールの入口を見つめていた。「でも一杯ぐらい飲みましょ
うよ。さあ、いらっしやい。退屈しているのは、自分のせ
いのよ」最初に見かけたカッフェで彼女らはコップに一
杯飲んだ、外に出るとすぐに、ジーニアはそれまでにはな
かった涼しさを風のなかに感じた、そして夏にアルコール
で血を清められるのはすばらしいことだと思った。その間
アメリリアは彼女に説明していた、一日じゅう何もしてい
ない人間だって、せめて夜ぐらいいは気晴らしをする権利が
あるはずよ、だけど女の子には、ときどき、流れ去る時間
をこわいと思う一瞬が襲ってくるわ、そうならもうい
くら走ったって何の足しになるのかわからなくなっていま
う。「あなたにはそういうことない?」「あたしはお勤めに
行くときしか走らないわ」とジーニアが言った、「あたし
あまり遊んでいないからそこまで考える時間がないの」
「あなたは若いから」とアメリリアが言った、「あたしは仕
事をしているあいだにも、じっとしていられないときがあ
るわ」

「あなたポーズをとっているあいだは、じっとしているん
でしょ」ジーニアが歩きながら言った。

アメリリアは笑い出してしまった。「そんなことないわ。
最も腕のいいモデルは画家をひどくじらすものよ。ときど
き動いてやらないと、画家のほうはあなたがポーズをして

いるのを忘れて、あなたを下女みたいにあしらひ出すわ。
羊のまねをする者は狼おおかみに食べられるのよ」

ジーニアはさりげない微笑ほほえみを浮かべて答えていたが、
アルコールよりも逆らいがたく、ひとつの言葉が彼女の喉のど
もとを焦がしていた。それで彼女はアメリリアに、なぜ涼
しいところに行ってもう一杯飲まないの、とたずねてしま
った。「ほんとにそうね」とアメリリアが言った。

いまでは身体がはてるのをジーニアは感じていた、それ
で店を出たときやすやすとアメリリアに言ってしまった。
「あなたにこれだけはお願ひしたかったの。あなたがポー
ズをしているところを見せてね」

しばらく歩きながらそのことを話しあった、アメリリア
は笑ってしまった、なぜなら裸にせよ服を着てにせよ、モ
デルは男の興味だけをひくものであり、ほかの女の子には
面白いはずがないから。モデルはじっとしているのよ、何
が見たいというの? ジーニアは画家が彼女を画いている
ところを見たいと言った。まだ色を混ぜているところを見
たことがないの、それはきつと美しいにちがいがなかった。

「今日や明日でなくていいの」と彼女は言った、「いまあな
たはお仕事をしていないのだから。けれども、またもしど
こかの画家のところへ行くことがあったら、あたしもつれ
ていつてくれるって約束してね」アメリリアはまた笑っ

て、彼女に言った、つれていくだけのことならわけないわ。画家が住んでいるところは知っていたから彼女をつれていくことはできた。「だけどもならずものばかりよ、用心してね」それでジーニアも笑った。

いつのまにか彼女らは小さなベンチに腰をおろしていた、早くも遅くもない時刻だったから、通る人影もなかった。その晩は丘のダンスホールで終った。

3

そのときからアメリリアは足しげく彼女をたずねてきて、いっしょに外出したりおしゃべりをした。部屋のなかに入ってきては大声で話してセヴェリーノを眠らせなかった。

ローザが午後に出がけにジーニアに声をかけると、ふたりがそろって外へ出て行くところだった。アメリリアは自分のタバコをきらしていた——たとえ持っていたときでも——そしてローザにはビーノとのいきさつを話してしまいなさいよ、とさまたまに言い寄った。彼女が自分の家の門番部屋にいたくないことはあきらかだった、さりとて一日じゅう何もすることがなかったから、彼女らといっしょにいただけでもうれしかったのだ。ふたりだけのときにももちろん、さんざんにローザを笑いのにしていたのだ

が、面と向ってもアメリリアは彼女の恋のいきさつを信じないふりをしてからかった。

ジーニアがアメリリアを信頼するようになったのは、見かけはいかにも陽気だが、彼女も哀れな貧しい女だと思いつたときからだ。彼女の目や乱雑に紅を引いた口を見ただけでいまではそれがジーニアにわかった。アメリリアがストッキングをはかなかったのは、それを持っていなかったからだ。いつもあの美しい服を着ていたのは、ほかのを持っていなかったからだ。いちど帽子をかぶらずに外へ出たとき、いつになく狂おしい自分を感じていい、ジーニアはそのことに思い当った。彼女の神経をいらだたせたのはむしろローザだった、すぐに彼女の心のなかを見抜いたから。「大変な生活をしてきたのね」とローザが言った、「服が破けたら寝ていなければならぬなんて」なぜまたモデルをしないのとジーニアは何度かたずねた、するとアメリリアが言った、仕事を見つかるためには失業していいことが必要なのよ。

昼のあいだはずっと何もしないで涼しくなる時分にいっしょに散歩に出かけられたらどんなにかすばらしいだろう、しかしふたりともたいそうあでやかなので、ショーウィンドウをのぞいていると、道ゆく人びとが彼女らを振り返るかもしれない。「あたしみたいに自由だと、腹立たしくな